

(本ページはホームページ掲載用に広報誌「あつぎ」の本文の前に挿入したものです。)

目次	ページ
1. シスターレティシア (巻頭文)	1
2. 「主の過ぎ越しの聖なる三日間」「復活祭」	2
3. ライアン神父様 追悼ミサ	3
4. 「終生誓願の喜びと感謝」シスターレティシア (聖母訪問会)	5
5. 高山右近の列福式と殉教地を訪ねて (後半)	6
6. 厚木教会の 若者たち 子どもたち	7
7. 講演会：ホームレスはあなたの身近にすべての人が幸せに	8
8. カトリック映画賞「この世界の片隅に」	9

シスターレティシア

山口道孝神父

3月下旬、私は2泊3日の駆け足で、フィリピンを訪問しました。早朝、羽田を発ち、昼過ぎマニラに到着。午後は、マニラの用事を済ませ、夜ホテルに入りました。翌朝、国内線ターミナルからプロペラ機で350キロ北のイサベラ州カワヤン空港に着陸、幾つかの村で用事を済ませ、夜の7時過ぎ、嘗て私が聖母訪問会のシスター方と共に活動していたギバン村近くの小さなホテルに泊りました。

太平洋戦争中、日本兵だけで50万人以上が命を落としたフィリピン。終戦までイサベラ周辺では戦闘が続き、たくさんのフィリピン人も犠牲になりました。友人のおじいさんで当時ある町の町長だったひとがいました。ある夜、おじいさんの家に抗日ゲリラ数名が現れ、“親日派”といわれて連行され、おじいさんはそれっきり戻って来なかったと聞いています。聖母訪問会は、こうした過去の傷が癒されていないこの地域で、和解のため、1977年3人のシスターを派遣し、25年間貧しい人びとのために奉仕活動を続けました。

今年の5月20日、厚木教会に毎週日曜日来てくださっているシスタービクトリーナが、鎌倉の訪問会本部“モンタナ修道院”で終生誓願を立てることになりました。この式に彼女のご両親と弟、それに友人のジルダが参列することとなり、私は、今回のフィリピン滞

在の最終日の朝、空港に向かうまでの全ての時間を4人のビザ申請と航空券の手配に使いました。ネット事情が悪く、宅急便もないギバン村の4人が、何とか誓願式の2日前に鎌倉に来ることが出来、私のイサベラ訪問の目的は達成されました。



誓願を立てるシスタービクトリーナ

シスター方が過ごしたフィリピンでの25年間、訪問会はひとつのことに拘っていました。もし、シスターの姿を見て、誰かイサベラの若い女性が修道生活を望んだ場合、自分たちの使命はメンバーを増やすことではないので、地元の修道会に入会することを勧めるということでした。その約束は守られ、訪問会は日本に帰国します。それから数年、ビクトリーナともうひとりの女性が訪問会への入会を希望し、十数年の後、今回の終生誓願となりました。式の中でシスタービクトリーナは、総長から新しい修道名を頂きました。“レティシア”、“幸せ”という意味です。参列したご両親をはじめ、シスターや多くの参列者の目から喜びの涙がこぼれ、神様の大きな御業を感じた瞬間でした。

「主の過ぎ越しの聖なる三日間」 「復活祭」

聖木曜日「主の晩さんの夕べのミサ」は4月13日(木)19時半から始まりました。福音朗読(弟子の足を洗う(ヨハネ13・1-15))に関連して神父様の説教から・・・

「足を洗うことは奴隷の仕事でしたが、神の子イエスが奴隷のようになって弟子のペトロの足を洗おうとしているのにペトロは『わたしの足など、洗わないでください』と言っている。このように私たちは自分の方からさげすむことが多い。神様は、だれも違いは無いと言っているにも拘らず、『いや私なんか、いやあの人なんか』とか、人間の方から区別し、差別している。それをすべて取り除くことが、この足洗いの意味だと思う。私たちのおごり、プライド、傲慢などを足を洗うことで無くすという深い意味があるのではないのでしょうか。神様の前では、すべての区別、差別はなく、人はだれでも平等であることを示しています。」

引き続き外国籍の信徒も参加された国際色豊かな「洗足式」が行われました。

聖金曜日「主の受難」、4月14日(金)18時から「十字架の道行」が行われ、19時半から祭儀が行われました。

復活の主日「復活の聖なる徹夜祭」、4月15日(土)19時半からミサが行われ、日本語、英語、スペイン語、ベトナム語で聖書朗読がされ、国際色豊かなミサとなりました。

洗礼式では3名の男性が受洗され、堅信を受けました。

神父様の説教から、・・・

「昨日のバチカンでの説教は教皇様ではなく、カプチン会の神父様が説教された。その神父様は『十字架だけが唯一の希望である。十字架は世の中のダメなものに対してたたくための十字架でなく、犠牲になっている人の為の十字架である』と言っていた。世を苦しめている、その者をたたくのではなく、どん底に落ちている

人の為に十字架は立っている。罪人をゆるさないということはありません。罪人はいつでもゆるされる。だから、刑務所にいる人がゆるされて、教皇様は彼らの足を洗った。しかし神様は罪自体についてはゆるさない。

イエス様が亡くなって息を引き取った瞬間、聖書の中では、神殿の幕が真っ二つにやぶれて落ちた。これは今までのことは終わったことを意味し、そして息を引き取った瞬間にイエス様は復活した。それは昨日の十字架のあの祭儀の中でイエス様は亡くなったときに私たちの過去は終わり、今から新しくなることを意味していると思う。」



復活の主日、普段のミサでは見かけられない信徒の方々も多く見かけました。今日も国際色豊かなミサで、聖書の第1朗読は英語で第2朗読はベトナム語で読まれ、共同祈願は日本語の他に、英語、スペイン語、ポルトガル語、ベトナム語で祈られました。

神父様の説教から、・・・

『ご復活おめでとうございます』と言うと『ありがとうございます』と答える人がいる。イエス様が復活したからイエス様おめでとうございますと言っているのか、神様の計画通りにできたからおめでとうございますと言っているのか？どちらも違うような気がする。新しい服に着替えたからお互いにおめでとうございますと言っているような気がする。

新しい服に変わっても中身が同じでは意味がない。私たちの信仰の中心はイエス様です。イエス様に従う事の大切さを考えるとイエス様の中に3つの職があり、祭司職、王職、預言職です。

祭司職：イエス様のように祈る人になる。大勢の人が集まっている教会はイエス様と共に祈る共同体である。祈る共同体として昨日と今日はどう違うか？復活されたイエス様に従う我々は違わなければならない。

決まった祈りではなく自分の言葉で祈る事も大切だと思う。フィリピンの人達は上手に祈っている。日本人やベトナム人は自由な祈りが苦手なようです。そういうことも変えていかないといけない。ミサは祈りの場です。遅れないようにすることも大切。小さい子供が泣いたり騒いだりしたとき皆で知恵を絞りその子に対応し皆で子供を育てることも大切。

カンボジアの仏教センター（僧侶は殺されてしまったのでいない）に行った時『将来の寺の役割は何ですか？』と聞いたら『人を育てる所です』と言っていた。カトリック教会も将来の為に人を育てなければならない。昨日と今日は変わっていかなければならない。

王職：私達も人に仕える人にならなくてはならない。物事の便利さや自分の都合ではなく人の為に文句を言うのではなく自らが働くことが大切。

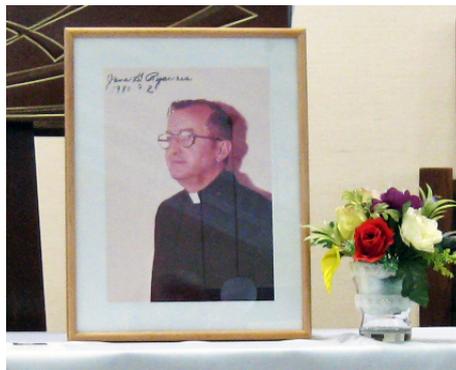
預言職：どう考えてもおかしい変な事に対して勇気をもって声を上げる。イエス様がここにおられたら、これはおかしいということでも黙っていることが、キリストに従っていることなのか考えなければいけない。」

(広報部 山内/竹内)

ライアン神父様 追悼ミサ

復活節第3主日（4月30日）に、2015年4月29日に帰天(94歳)された厚木教会の創立者であるライアン神父様の追悼ミサが行われました。ミ

サの中で聖書朗読、答唱詩編、また共同祈願をライアン神父様と関わりの深かった方々が担当されました。



福音説教の後で小松恵一さんがライアン神父様の思い出をお話になり、以下にその概要を記します。

「私は昭和45年から昭和55年までの10年間、厚木教会の委員としてライアン神父様にお仕えしてきました。今思えば数々のことが走馬灯のように浮かびますが中でも一番の思い出は、神父様が60歳近くのある日、私は、『何時もお元気

ですね、神父様の素晴らしいエネルギーは、何処から生まれるのですか』とお尋ねしたことがあります。神父様は私に、神学校に入る前の大学生の時に、読まれた英語の詩



を紹介し、『小松さん訳してみてください、これがヒントです』と言われたことがありました。この詩は、亡きアメリカの詩人サムエルウルマンの作で、題は“青春”です。

要約しますと、《青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方を言う。たくましい意思、ゆたかな想像力、炎える情熱をさす。青春とは人生の深い泉の清らかさを言う。

20歳の青年よりも時には、60歳の人に青春はある。年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うとき、初めて老いる。神から、人々から、美・希望・喜び・勇気・力の靈感を受ける限り、若さを保つ》。私はこの詩を熟読して、神父様が

厚木教会設立の為に情熱をかけられ、司祭としての司牧を尽くされていたお姿に、更なる深い尊敬を抱きました。

離任されてから19年後の平成10年(1998年)、神父様の司祭叙階50周年金祝の式典と祝賀会がテキサス州のアボット無原罪教会でありました。私達夫婦と池永夫妻の4人でテキサスまで行きました。盛大なミサの中で、管区長がライアン神父様の司牧の偉大な業績を二つ述べられました。第一は、日本で厚木教会設立までを実施され、司牧をつくされことです。第二は、テキサスでは先住民地区やヒスパニア地区で司牧されていることです。この偉大な二つの業績の精神は、司祭としての開拓者精神ですと言われました。

その後、盛大な祝賀会を開催して頂きました。祝賀の席で、スピーチを依頼され、私が致しましたスピーチの概要を紹介します。

親愛なるライアン神父様
神父様の金祝と聖なる晩餐、おめでとうございます。日本での長い司牧と厚木教会の設立に感謝を申しあげます。神父様の蒔かれた一粒の麦は、現在千粒になりました。私達は、偉大な神父様にかげがえのない大きな霊的教えを受けました。今日は、1,000人に代わって4人で日本の厚木から来ました。そして、厚木の皆さんからのお祝いのしるしも持参しました。神父様が厚木で歩かれた道は、深く我々の心に残っています。そして、神父様の精神は、厚木教会の信徒の皆さんの心に、永遠に残るでしょう。最後に、神父様の健康と今後の活躍、そして、アボット無原罪教会、及び、司祭館の発展をお祈りいたします。最後に、ライアン神父様ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします」

(広報部 竹内/山内)

厚木教会ができるまで
長澤とよさんの共同祈願から

1961年、厚木に転居した長澤さん宅で、日曜午後ライアン神父様によるミサが捧げられた。

当時の信者は3人。少しずつ輪が広がり、中町会館でミサが行われるまでになった。

平日は、神父様とカテキスタの山口きく子さんと長澤さんで、月に何回か愛川町の障がい者宅の家庭訪問に行かれた。また、清川村への聖書研修会へも、神父様の車で行かれた。

当時相模原教会は無かったので、神父様の訪問をたくさんの方が待ち、喜んでいらした。信者未信者すべての人々に明るく接して希望を与えていらした。



厚木教会建設のために、多くの方々が協力くださった。ライアン神父様の姉妹やバーク神父様のお母様や姉妹など、資金援助のために厚木教会へ訪問くださった。厚木基地関係の方々やご家族の皆さんにも、応援やご献金を頂いた。

1968年、300坪の水田を神父様の友人、ライオンズクラブの大橋会長さんの紹介で、教会建設地として購入。

ライアン神父様は、厚木基地の教会でのミサ献金をすべて教会建設資金に充ててくださった。また、平日は東海大学の英語講師をされたり、出身地アメリカへ建設のための募金の旅に何度か行かれることもあった。信者の方々は、縫い物や製品作りを一生懸命頑張り、バザーを何度か行なって、自分たちにできることで基金の積み立てに協力した。

1969年、教会の棟上げの日、大勢の信者さん達の喜びの日、それが厚木教会の第一歩となった。カテキスタの山口さんを厚木教会にお迎えして、1970年3月にカトリック厚木教会の初ミサがライアン神父様によって捧げられた。

ライアン神父様のご冥福をお祈りいたします。

(広報部 松本)

「終生誓願の喜びと感謝」 シスター レティシア(聖母訪問会)

5月20日(土)、シスター レティシアさんの終生誓願式がモンタナ修道院で行われ、5月21日(日)のミサの中で「その思い」を語りましたので、以下に記します。

みなさん、こんにちは！ 今日のミサの中で一言感謝申し上げます。私の終生誓願の喜びを、昨日も今日も共にして下さった皆様に、本当に感謝しています。特に、昨日は奉納と拝領の歌をプレゼントして下さってうれしかったです。

今日の福音にあったように、イエスさまが弟子たちに聖霊を送り平安を与えて下さり、それによって私たちは恐れがなくなり、イエスさまが共にいて下さることを感じられます。聖霊は、私たちの人生の歩みの中で働いて下さるのです。

それに関して、私の小さい体験を分かち合います。一つは、私が小さい時、母が病気になりました。その時、兵隊としてイザベラに住んでいた母の兄が、カガヤンを訪ねてきました。その時、母の病状を知り、母をイザベラに連れて行きました。

私たちは祖父母にあずけられました。神の恵みによって母は元気になりましたが、カガヤンに戻らず、そのまま家族みんなでイザベラに引っ越しました。実は、神様が母の病気を通して、イザベラですでに宣教していた聖母訪問会のシスターと私が出会うことになったのです。

シスターたちの宣教の姿勢はいつも小さい弱い立場の村の人たちに向けられていました。私はまだ召命を感じていませんでしたが、シスターたちの姿に感動していました。これが、私と聖母訪問会の霊性との出会いでした。それで、

私は自分の召命を感じた時フィリピンの会ではなく、聖母訪問会を選びました。この選びが終生誓願の恵みにまで続きました。私は、この選びを生涯大切にしたいと思います。

もう一つは、修練期1年の静修の時に「主の祈り」を深めるようにすすめられました。天におられる私たちの父よ！ と祈った時に「父」に心がとまりました。深く祈ってみると、実は私が自分の父を受け入れていないことに気付いたのです。私は父の欠点のみを見て神様に文句のみを言って、この黙想の後で神様は私に父の良い点をたくさん気付かせてくれたのです。

その一つは、父はほとんど毎日、目の見えない老人を訪ね、ご主人が亡くなってからも、その盲人の奥さんの面倒を見ていました。その他にも、父は本当に困っている人に寄り添って、仲間として

大切にしていたのです。私が黙想で父を受け入れられたのは、父が“善いサマリア人”にびったり重なったからです。父が“善いサマリア人”に感じられたのです。その後で私のものの見方に変化ができたのです。表面だけでなく、中や裏を見ることができ始めました。

つまり、聖霊の働きが出会いを作り、ゆるしと受け入れを可能にしてくださったのです。聖霊は実際の生活を通して味わせてくれる恵みなのだ、今思い出しています。これからも聖霊は、私が本当に天の父の子になるまで導いてくださると信じています。そのためにも、私はこれからも、自分を開いていつも表面だけではなく、深くみ旨を悟って歩んでいきたいです。私の終生誓願のお礼として分かち合わせていただきました。

(広報部 山内)



高山右近の列福式と殉教地を訪ねて (後半)

フランス・アッツ 成田 正一 (10CM)

◆3日目 大津を朝8時に出発。バスの中で朝の祈りとシスターたちの先唱でロザリオを一環唱えながら金沢教会を目指しました。金沢教会にてミサをしました。金沢教会には貴重なキリシタン遺物が保管されていました。昼食の後金沢城を城内の高台から見学。

右近がマニラに出発する前に領民と別れた追手門などを信徒の高田実さんから紹介されました。

雪のない兼六公園をバスガイドさんの案内で、有名な松の木の雪吊などを見ながら一回りし、付近の土産物店でそれぞれ金沢名産の買い物を済ませて、和倉温泉のホテル金波荘に出発進行。

金波荘は石川県の温泉の中で2番目に素晴らしいホテルだそうです。七尾西湾の海岸に面した温泉で塩分の強いお湯でとても身体がポカポカする、良い温泉でした。

◆4日目：最終日朝食後、金波荘を後に滋賀町（しかまち）で右近の銅像のある小さな公園を訪ね、そして不思議な出来事として、公園から少し離れたところに急な細い坂道を登ったところに、右近の家族の少し大きな石を重ねた質素なお墓があり、みんなで、途中バスの中で唱えていたロザリオが一連残っていた事を山口神父様が気が付き、お墓の前でお祈りしました。何か右近の家族の魂が私たちを迎え、祈りによって交われたひと時でした。

一同バスに乗り七尾教会に向かいました。神父様が右近の記念の真っ赤な祭服を着て、そこで4日間の巡礼の恵みに感謝する、ご聖体と御血拝領での巡礼最後のミサを捧げました。七尾教会の後、南蛮寺として知られる本行寺で30代目の小崎学円（こざきがくえん）住職さん

の説明を聞きました。前田家の客将となった高山右近でしたが、本行寺は茶道の祖、円山梅雪が建立した寺で、千利休と親交が深かった右近は茶道と新しい信仰の共同体の拠点として育てられました。

この本行寺には、右近の直筆の手紙や茶器、十字の刻まれた短刀など重要な遺物が無造作に保管されており、私たちを迎えた住職は携帯マイクを持って「はい団体行動して下さい。個人で物に触らないでください」と説明の合間にみんなを見張りながらの、小雨の降る寒い中で高山右近を誇りに思う熱弁での説明でした。こうして3泊4日の殉教地の旅を終え、新高岡駅より北陸新幹線で帰路につき、疲れを感じない、充実した旅でした。

この高山右近の巡礼の旅で思った事は、右近の63年の生涯は試練の連続であったということです。キリストの福音を生きたがために明石六万石の大名でありながら、豊臣秀吉の伴天連追放令で領地が没収され、1588年によく加賀金沢の前田利家に客将として迎えられ、26年もの長い間教会と社会に奉仕する模範的な日々を送られたとのこと。

とにかく、右近の生き方は現代の私たちにとって、信仰の在り方生き方の手本であると強く思い、右近さんに倣って生きたいものと、日々努力すべしと心に決めました。



右近の家族のお墓の前でお祈り

厚木教会の 若者たち 子どもたち

厚木教会の第1主日のミサは、子どもたち自身が典礼での大事な役割を担い奉仕をしています。そのための準備や知られざる苦労を、リーダーの皆さまや典礼部の方々にお聞きしてみました。

侍者

主日のミサでは4、5人が担当。全部で約30人います。最後の晩餐の時に弟子たちがイエス様のそばにいたように、聖変化の時、侍者もイエス様の一番近い所で神父様と一緒に奉仕できる喜びを感じてもらいたいです。侍者奉仕をしながら成長し、次第に先輩として後輩の侍者に教え始めている姿を嬉しく感じています。皆様には、長い目で成長していく姿を見守っていただきたいと思います。(上田啓二リーダー)

先唱

中高生に時々やってもらっています。ただ、早口になったり、途中わからなくなった場合を考えて、必ず隣りに1人大人がついて指導するようにしています。

朗読

年間の担当者が決まっていて、ひと月前から1週目の教会学校の後20分位練習し、当日も朝一番に来て準備しています。聖堂の後ろの方のご老人にも聞こえるように「ゆっくり・大きな声で・できれば優しい声で」を合言葉に、頑張って朗読しています。奉仕を楽しんでやっている子どもたちの姿をすばらしいと感じます。

(石谷千絵子リーダー)



答唱

何度か子どもたちに答唱を歌ってもらいましたが、人前での緊張感と恥ずかしさで、最近は率先してやる子がいなくなってきました。そこで最近、手話をつけて、みんなで練習をし始めたところです。

選曲

選曲は典礼部。子どもに合った、その日の典礼に合った曲をピンクの冊子「ともに祈ろう」から選びます。これは厚木教会オリジナルの冊子です。入祭は必ず、子どものミサに相応しい「神様の愛は」を歌っているのを、皆さんお気づきですか。でもまだまだ歌ったことのない曲が冊子にはあるので、今後はそれらを歌っていきたいと考えています。

(典礼 船戸美穂さん)

オルガン

土曜日に矢作れい子リーダーに教わったり、平日、中山美津子さんに教わったりした子ども2人が主に、自分たちが弾ける曲を中心に弾いています。

山本恵子部長は、「みんなが自分の力を発揮して、楽しんで奉仕活動をして欲しいと思っています。」と話してくれました。

(広報部 松本)

講演会：ホームレスはあなたの身近に 全ての人が幸せに

福祉部主催で5月21日(日)ミサ後に講演会・DVD(釜ヶ崎の児童館「こどもの里」の活動)上映が北村年子氏により行われた。DVDは、ヨハネの部屋の棚に備えられ、借り出しができます。

北村年子氏

2008年「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」を発足。子どもの「いじめ」「自死」「野宿者襲撃」をなくすため、人権尊重教育の講演、ホームレス問題の授業の実践に取り組む。厚木市内の中学校でも講演、ラジオ番組でも紹介された。



- ・「ホーム」レスは安心できる人間関係が無い状態(孤立・孤独・虐待・DV・引きこもり)
- ・「ハウス」レスは経済的貧困(失業・借金・ピンボ)
- ・現代の貧困＝経済的貧困＋人間関係が無い＋情報の貧困：6人の子どものうち、一人は経済的貧困状態と言われている。

自分を肯定できない「生きづらさ」が「いじめ・襲撃」を生む Q:なぜ若者たちは「ホームレス」の人たちを襲うのか？

1995年に大阪・道頓堀で63歳の野宿者が24歳の若者に川に落とされて亡くなった。加害者の青年は野宿者に親切に接していたと、彼の仲間たちは言う。そんな心優しくったはずの若者が、なぜ豹変？彼もまた発作性の持病のため、ずっと学校でいじめられ、社会でも就労差別に

あい、安心できる居場所がなかったこと、そこには弱い者が、さらに弱い者を攻撃するという「いじめの連鎖」の構図があった。

暴力は、怒りの爆発。怒りというのは二次感情だから、その根っこにはならず一次感情がある。それは言葉にならないモヤモヤとした感情やストレスです。「つらい」「寂しい」「苦しい」といったマイナス感情を安心して言葉にできず、「頑張らなくちゃいけない」「こんなんじゃダメだ」と抑圧する中で、表に出てきたときには「イラつく」「ムカつく」と、怒りになる。この感情の爆発が暴力であり、それが弱い者へと向かうのがいじめであり、襲撃である。

加害者自身も過去のある時点で、必ず痛みの被害者となっているため、一次感情の「心の声」を聞き、「つらい心」を受け止めてあげない限り、怒りを解消することはできない。

不完全な自己を受け入れ命の尊さを理解する「自尊感情」 Q:「いじめの連鎖」を断ち切るために何が必要か？

彼はまだ自分に余裕があった時、野宿者たちに食べ物を分け与え、「しんどいけれど頑張ろうな」と励ましていた。でも、仕事が無くなり、いくら面接へ行っても断られる中で「どうせ自分はダメなんだ」と自己否定し、自傷行為に走った。それは「自尊感情(自己尊重感)」が、まさにゼロに等しい状態。その抑圧された怒りが限界を超えた時、自分とよく似た社会的弱者の野宿者へと、怒りの衝動が向かったのだ。

“いじめの連鎖”を断つためには、格差・競争社会の変革とともに、個々の「自尊感情」を高めることが大切と気づかされた。誰が何と言おうと、自分には価値があると思えるのが真の「自己尊重」。不完全な自分があるがままに受け入れ、許し、弱い自分も含めて受容し、他人の尊厳も同じように大切に「I am OK, You are OK.」という等価の精神が、すべての命は等しく尊いという認識につながっていく。

いじめや襲撃という「不幸な出会い」を希望ある出会いへと変える Q:「ホームレス問題」を考えるための教育活動は

釜ヶ崎の民間の児童館「こどもの里」では、1月から3月までの毎週末、幼児から中高生の子どもたちが野宿者におにぎりや毛布を配りながら話をする「子ども夜まわり」をしている。大人が声をかけても「放っていてくれ」と自暴自棄になっている人も、子どもの言葉には涙を流したり「ありがとう」と言ってくれる。そして何度も会話するうちに、子どもは野宿に至った人たちそれぞれの過酷な背景や物語を知る。「おっちゃんたちは、悪い人でも怖い人でもない。一生懸命働いてきたけれど、怪我や病気やリストラ、いろんな理由で働けなくなって社会から切り捨てられた」。

生きた情報、実体験だから、どんな授業より、どんな書物よりも、はるかに得るもの大きい。「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」では、今各地の学校現場で「ホームレス問題の授業」を展開し、子どもたちと野宿者とが直接出会う場を設けて、お互いに理解し、人の命や人権を尊重するための学習を行っている。

競争を強いられ、受験や格差社会で追い詰められている今の子どもたちは、たとえ住む家があっても、学校でも家庭でも「ホーム・レス」。「ホーム」とは、心が安心して帰ることのできる、ありのままの自分を受け入れてもらえる居場所。私たちが本当に目指すものは、「ホームレス問題の授業」を通した“ホームづくり”だ。

また、襲撃事件が繰り返されるのは、大人たち自身の「ホームレス」への差別や偏見、排除と無関心が最大最悪の要因であり、その意識が子どもたちに反映している。大切な子どもたちを被害者にも加害者にもしないためには、まず大人たちが自らの差別意識を問い直し、変わっていく必要がある。そして親でなくても教師でなくても、**私たち一人ひとりが出会う子どもたちの「ホーム」になれるよう願っている。**

*当日の配付資料から (広報部 山内)

**カトリック映画賞
「この世界の片隅に」**

5月20日(土)になかのZERO大ホールで、第41回カトリック映画賞「この世界の片隅に」の上映会と授与式が行われました。会場は1200席が満席に近い状態でした。この映画はアニメ映画で、完成するのに6年を要したそうです。

ストーリー：昭和8年、広島市内。絵をかくのが好きな8歳の少女・浦野すずは兄と妹に囲まれ、家業を手伝いながらの毎日でした。

昭和19年、18歳になったすずに、突然縁談の話が持ち上がる。すずは周囲に言われるまま、軍港の町、呉の北条家に嫁いでいく。嫁ぎ先には夫・周作と両親がおり、夫を亡くした義理の姉・径子とその娘・晴美が出入りしていた。

戦時で物資が欠乏するなか、すずは生活の切り盛りに奮闘する。粗末な食材も工夫して料理することで食卓を彩り、着物を仕立て直してモンペをこしらえる。そこには日々積み重ねられる営みの輝きがあった。

戦況が悪化し、昭和20年6月、すずと晴美は入院中の義理の父を見舞うが、その帰り道で空襲に遭遇。晴美は帰らぬ人になり、すずは一命をとりとめたが、右手を失った。それでも懸命に生きようとするすずだが、径子に責められ、自分の居場所を北条家に見いだせない。ますます激しくなる空襲のなか、すずの心は、故郷に帰りたいと叫んでいた。

8月6日の朝、実家に帰る準備をするすずだが、その時、激しい振動と閃光が一带を襲い、空にはきのこ雲が上っていた。午前8時15分、広島に新型爆弾が投下されたのだ。

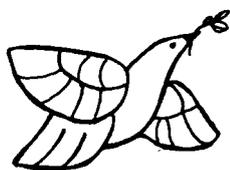
8月15日の終戦の報に、激しい憤り、嗚咽するすず。しかし、それでも毎日はやってくる。

すずは自分の子が無かったので、焼け跡で出会った戦災孤児を家に引き取り、新しい家族の一員として育てていく生活が始まった。

(一部、映画パンフレットより抜粋)

感想：アニメーション映画でしたが、当時の時代の風情がよくわかり、街や野山の描写が細かく美しく映像化されていた。また、空襲警報下、敵機による機銃掃射の爆撃音に圧倒され、恐怖の空気を感じた。映画のラストで戦争孤児を引き取って面倒を見ていくことになったらずに心の安らぎを覚えた。平和の尊さを痛感する映画であった。 (広報部 山内)

個人情報につき、ホームページでは削除します。



受洗おめでとうございます

個人情報につき、ホームページでは削除します。

異動情報

(2017. 3. 1～2017. 5. 31) 敬称略

教会事務へのお届出時に掲載を希望されない方の情報は割愛しています。

編集後記

ライアン神父様の追悼ミサ記事で二人の方から提供された情報をほぼ掲載できてホッとしました。

終生誓願されたシスター レティシアさんの思いに恵み豊かな聖霊の働きを感じました。

原稿作成に尽力された鈴木(正)さんが広報部を退任され、益々部員の補充が僅々の課題です。

なお、誤字脱字などに細心の注意を払っていますが、生じた場合にはどうぞご容赦ください。

(広報部 竹内、山内、松本、植木)